

お世話になった皆様へ、
「パン工房まりも」より心を込めて
ラスクセットをお贈りしました。



「パン工房まりも」
精神保健福祉士
宗雲 美樹

熊本地震では当院も大きな被害を受け、一時は「パン工房まりも」の活動を中止せざるを得ない状態となりました。患者さん、ご家族をはじめ、関係者の皆様には、たいへんご迷惑をおかけしました。皆様のおかげで、ようやく平常を取り戻すことができ、またみんなで力を合わせて美味しいパン作りに励んでおります。工房ではこの度、地震に際して多大なご支援をいただいた方々に感謝の心を込め、人気のカンパーニュとフランスパンを使ったオリジナルのラスクセットを作り、謹んで贈らせていただきました。

患者さんの社会復帰をめざして開設された「パン工房まりも」も、今年で18年。2010年の「ユニバーサルベーキングカップ」で最高賞の金賞に輝き、今も、厳選した素材と無添加にこだわった体に優しいパン作りを続けています。これからも「パン工房まりも」のパンを、よろしく願いいたします。



社会医療法人ましき会 益城病院
〒861-2233 熊本県上益城郡益城町惣領1530
TEL.096-286-3611

外来お電話受付時間(月曜～金曜)
午前:9:00～12:00 午後:13:30～17:00

益城病院 検索 表紙タイトル:Reborn(リボーン) 新しく生まれ変わること。再生。

デザイン:吉本清隆デザイン事務所 取材・編集:堀地久美子 撮影:野中元

Reborn



社会医療法人ましき会

益城病院

一歩ずつ前へ①

総合受付が復活しました。

フロアマネージャー
園田 淳子

地震以後、院内道路の欠損や仮設での対応で、来院された方に大変なご不便をおかけしておりましたが、7月27日によやく総合受付を再開することができました。来院した患者さんのご家族が「大変でしたね」と涙ぐまれ、「早くこちらの病院に帰って来たい」との声も多くの方から聞かれました。県道沿いからのアプローチでは、不安を抱えながら病院へ向かう患者さんを、緑の木々や季節の花々が優しく迎えてくれます。人々の心の窓口として、そっと心を開いてくれる皆様の色々な声に耳を傾け、適切にお答えできる総合受付でありたいと思います。



患者さんを 受け入れてくださった皆様へ

事務部診療支援科 科長・精神保健福祉士
福島 郁雄

前震後の4月15日、県内の精神科病院や内科病院、社会福祉施設、介護保険施設などから、絶え間なく電話が入り、患者さんを受け入れるという申し出をいただきました。そして、道路事情の悪い中、20の病院、施設から迎えに来られ、多いところでは20人、計149人を受け入れてもらいました。困難を極め、目処が立たない中、どれほど頼もしく有り難かったことでしょうか。今思い出しても胸が熱くなります。翌日の本震で自らも被災され、大変な思いをされたところも多く、申し訳ない思いでした。

阿蘇やまなみ病院もその一つで、遠路はるばる院長自ら駆けつけていただき、その後の本震で甚大な被害を受けられ、他県の精神科病院に数十名を転院させなければならない状況になりました。当院の患者さんが転々とするのを避けるため、転院されたのは同院に入院されていた患者さん方でした。その気遣いに深く感謝いたします。移動中に意識消失するなど、転院による環境変化で患者の状態が悪化するケースもあり、皆様には大変な心労をおかけ致しました。

4月下旬に、状態把握と情報交換のために転院先を訪ねた際、患者さん方が落ち着いた表情で過ごされていました。手厚い看護、介護があつての事だと思います。患者さんのご家族からも「とてもよくしていただいている」という声をたくさん耳にしました。

当院の入院機能も徐々に回復し、6月中旬から転院者の受け入れを始めることができ、やっと活気を取り戻しつつあります。8月上旬から理事長、院長、看護部長、事務次長が転院先へ挨拶回りを行っていますが、いずれの転院先からも温かい歓迎と労いの言葉を頂戴しました。

転院・退院した患者さんも、8月18日現在で127人が戻ってきました。患者さんや家族の方にも、少しずつ日常が戻ろうとしています。この震災を機に、益城病院は地域との絆を深め、非常時には即戦力として真っ先に駆け付けることができる病院でありたいと思います。この度は本当にありがとうございました。



荒尾こころの郷病院から申し送りを受ける



山鹿回生病院から帰って来られた患者さん



天草病院へお礼の挨拶の様子



酒井病院の先生方との記念撮影

4月15日(金) 転出患者状況

| | |
|-------------------------------|------|
| 阿蘇やまなみ病院 | 20人 |
| 菊池有働病院 | 12人 |
| くまもと心療病院 | 12人 |
| 中山記念病院 | 10人 |
| 山鹿回生病院 | 8人 |
| ニキハーティホスピタル | 5人 |
| 明生病院 | 5人 |
| 八代病院 | 5人 |
| 弓削病院 | 3人 |
| くまもと青明病院 | 2人 |
| 熊大病院 | 2人 |
| 十善病院 | 3人 |
| 博愛会病院 | 3人 |
| 美里リハビリテーション病院 | 2人 |
| 熊本回生会病院 | 1人 |
| 有料老人ホームゆめのかげはし | 4人 |
| 特養 そよかぜの里ほたる | 1人 |
| 救護施設真和館 | 3人 |
| 宿泊型自立訓練施設コスモ | 5人 |
| 県立こころの医療センター | 4人 |
| 県立こころの医療センター(避難所) | 39人 |
| ※県立こころの医療センター(避難所)から更に転出した患者数 | |
| 天草病院 | 9人 |
| 荒尾こころの郷病院 | 7人 |
| 酒井病院 | 4人 |
| 山鹿回生病院 | 5人 |
| 松田病院 | 13人 |
| 自宅 | 1人 |
| 合計 | 39人 |
| 自宅 | 50人 |
| 合計 | 199人 |



復興に向け、ともに頑張りましょう



〈寄稿〉

特定医療法人高森会
阿蘇やまなみ病院

嶋田 浩二事務長

4月15日8時の朝礼で高森院長から開口一番、「益城病院の患者を受け入れようと思う」。指示を受けて、看護部長も「行くなら、先方も混乱していると思うので早いほうが良いです」と前向きな返答。病院長からの方針が出たら、職員は有無を言わずに行動に移すのが当院流です。そこから病棟、薬局、栄養科、総合支援室での受け入れの準備が慌ただしく始まり、11時に病院長、看護部長他12名で、バスを含む6台の公用車に分乗して当院を出発しました。

益城病院から受け入れた患者さんたちは、14時半に当院に到着し、不安そうにバスから降りてこられました。1階のデイケア室で5名の医師による診察が速やかに行われ、ロビーの茶屋で遅い昼食をとられてからは、少し安心された様子で病棟に入られました。

15日の時点では本震が来るなど思いもせず、少しでも役に立ちたいとの思いで出発しましたが、無事に20名の患者さんを受け入れられたことが何よりでした。

最後に益城病院の1日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

Hand in Hand

手を取りあって

熊本地震発生後、ライフラインが壊滅状態のなか、避難や転出を選択せず入居者のより所であり続けたグループホーム「ふるさと」。入居者のご家族の声を紹介します。

我が家のように安心できる場所。

平成19年に他の施設から転入したという山本政子さん。しっかり者で、歯ごたえのある食事が好きだということでもお元気な98歳ですが、熊本地震の後、脳梗塞で国立病院への入院を余儀なくされました。「病状は落ち着いたものの、食事が入らなくて点滴だけになり、とても心配しました」と語るのは、甥の清水晃さん。しかし、2週間後、退院して「ふるさと」に帰ると、穏やかな表情が戻ったそうです。「親しい皆さんの顔を見てホッとしたんでしょう。ご飯も食べられるようになり、今では入院前よりよくしゃべるほどです」。非常事態でも大事な家族を安心して任せられたことが、何より有り難いという清水さん。スタッフのプロ意識が高く、医療的な対応がしっかりしているところを高く評価しているのだとか。また、家庭的で、入居者の好みや生活のペースを大切にしてくれるため、ここにいる人はみんな、いつも落ちついた表情をしていると感じるそうです。毎週「ふるさと」を訪れ、伯母さんに語りかけるという清水さん。「施設との信頼づくりには家族の努力も大切ですから、できるだけ通ってあげたいと思います」と語っていただきました。



デイルームで歓談する山本政子さんと甥の清水晃さん

にこやかに穏やかに100歳を迎えてほしい。

益城町にある7ヘクタールの畑で農業を営む桑野さんご夫婦は、忙しい農作業の傍ら、週に1度は「ふるさと」にいる母親のアキさんのところに顔を出していたといいます。しかし、熊本地震で家が倒壊し、生活は一変。今は桜木に借りたアパートから畑に通いながら、家屋の解体作業の真っただ中です。「地震の時、ばあちゃんのことを一番心配でした。ここがあってほんとに助かった」と、息子の広昭さん。避難所と畑の往復に明け暮れ、なかなか面会に来られなかった時期も、「ふるさと」なら大丈夫と安心していただけました。「来てみたら本当に被害がひどくて、こんな状態で母をみてくれたんだと思うと有り難かった」と妻の信子さんもうなずきます。平成20年に入居したアキさんは、現在98歳。「がまだしもんだっけん、はじめは家に帰りがたかったけど、皆さんやさしくて、ここが気に入らさす」と信子さん。「静かに自然に年とって、大事にしてもらって…ばあちゃんは本当に幸せ。山本さんともう一人、同年の3人そろって元気に100歳を迎えてほしいです」と、広昭さんはアキさんを見ながら笑顔で話していただきました。



居室にて、歟野アキさんを見守る息子夫婦の広昭さん・信子さん





一歩ずつ前へ②

被災からスタートした在宅診療部

副看護部長 兼 在宅診療部 部長代理・看護師
増田 なみ子

5月中旬、5名の看護師等が中心となり、施設や個人宅の患者さんをサポートするための在宅診療が始まりました。さらに、震災等の影響で診察に来られない外来患者の安否確認とアウトリーチが重要だと考え、6月1日に7名のスタッフで在宅診療部を発足させました。その陰には、まだ地震の衝撃も癒えない5月上旬から支援に来ていただいた岡山県精神科医療センターと岡山県精神科病院協会の「チームおかやま」の存在がありました。チームおかやまの皆さまには、様々なご協力をいただきました。片道30分以上かかる場所にも率先して自分たちのレンタカーを出して下さったり、道中、私たちスタッフの話にも耳を傾け、労いの言葉をかけていただきました。

バスも止まり町の機能も壊滅状態の中、大変な思いをして診察に来て下さる患者さんを、こちらから出かけて行って支えたい。どうやって支えよう？そこで、訪問診療・往診を軸に、訪問看護、認知症初期集中支援、地域支援、障がい者支援等のアウトリーチを行えるよう在宅診療部の体制を整え、益城町の生活総合相談窓口の支援にも参加しました。

地震により、これまで安定していた方が不安定になったり、避難所暮らしや転居のストレスから周囲とトラブルを生じたり、施設でも対応できず家族も疲れ果てているケースが少なくありません。また、認知症の症状が出始めた人に周囲が気づかず、症状が進んでしまうこともあります。仮設住宅への入居が本格化するこれからは、孤独や戸惑い、混乱によって状態が悪化する人や、認知症の周辺症状(BPSD)が出る高齢者も増えることが予想されます。今後は、認知症疾患医療センターや外来、主治医、地域からの要請に応えながら、来院できない人への定期的なサービスを充実させるとともに、急変時には随時往診ができる体制を整え、自宅での生活を支えるチームとして、他部署と連携しながら地域支援をめざしていきます。

ライフラインで重要なことは代替手段を確保しておくことです。公共上水をカバーする井戸水、九州電力に代わる自家発電装置の確保などですが、今回はそれがうまくいかず、復旧の遅れにつながりました。小型の自家発電装置が2台しかなく、本震災後は限られた電源による対応を迫られました。

- ・当院には270KVAの発電装置（コジェネレーション）がありましたが、震災前から修理を必要とする状態で、震災時は稼働出来ませんでした。病棟屋上に設置されていた非常電源設備は、大きな余震が続く中で給油作業には二次災害リスクが懸念されたため、補給を断念しました。
- ・水は支援物資が多く届きましたが、自衛隊からの給水活動にも助けられました。大容量ポリタンクの確保に苦労する中、長い給水ホースが受水槽に設備されていれば、給水車輻から受水槽へ直接給水することが可能だったと思います。
- ・地下埋設配管やパイプシャフト内配管の脆さも露呈しました。配管は原則露出で、装置は完動するよう点検を怠らないことが大切だと実感しました。

4月17日、悪路の中、平成病院から自家発電機8台とガソリン缶8缶、不知火病院から自家発電機1台とガソリン缶10缶、ドラムコードやハンディライトなどが届けられた。とてもありがたく、決断と行動の早さに組織力の強さを感じた。



ライフライン

被災の知恵を明日へ～熊本地震から学んだこと～

事務部 次長 宮崎 翔



- ・東日本大震災直後、当院では危機管理対策として、患者さんと職員用に緊急避難バッグ約250個を病院建物内の避難経路に配備していました。
- ・熊本地震発生後、職員や患者さんはバッグを1個ずつ背負って避難しました。バッグには5年保存水500mlが4本入っていて、地震直後の緊張状態による喉の渇きも潤すことができ、冷静さを取り戻すことができました。
- ・職員は、建物内の片付けや移動時にはバッグを背負ってヘルメットをかぶり、安全確保に努めました。バッグには部署名、名前を明記することで、背後からでも人物確認が容易にできるようにしました。

「地震対策30点避難セット」が入った緊急避難バッグ。簡易トイレ、アルコール除菌ジェル、給水袋、レスキューシート、加熱袋、発熱剤、カイロ、軍手、レインコート、ダイナモ多機能ライトなど、とても重宝した。



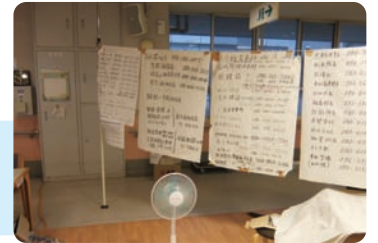
緊急避難バッグ

情報通信

東日本大震災では、電話、メールなどの通信インフラは全て破壊され、アマチュア無線やMCA無線がSOSの手段として有効だったようです。熊本地震でも電話回線は不通状態に陥り、LINEやTwitterなどSNSを利用した連絡や一斉呼びかけが有効でした。

- ・前震発生から約1時間後、入院患者さんと夜勤者の安否情報と緊急召集を知らせる一斉メールを全職員へ配信しました。被災した職員も多く、出勤困難者に対して病院の状況などをメールで毎日配信するとともに、インターネット上に職員専用の電子掲示板を設置し、情報共有を図りました。
- ・電話交換機は本震で破損し、使用不能となりました。従来から、当院にかかってくる夜間帯の外線電話は、NTT電話転送サービスを利用して、病棟にある夜間専用携帯電話2台に転送される仕組みとなっていました。震災後も昼夜問わずこのサービスを設定維持しておくことで、不通となることは何とか免れることができました。

理事長の提案で、本震後、関係各位の連絡先一覧を本部に掲示した。誰もが見やすい大きな文字で必要な情報を共有でき、アナログな手法の良さも再発見した。



2度に及ぶ震度7の揺れと続発する強い余震によって、益城町に壮絶な被害をもたらした熊本地震。8月現在も、私たちは、まだ復旧に向けた闘いの真っただ中にあります。この大災害によって失ったものは数知れず、克服しなければならぬ課題も山積していますが、今ここで被災をふり返り、経験から得た貴重な学びと考察を一人でも多くの人と共有し、次に活かしていけたらと思います。

自動ラップ機能搭載トイレ「ラップボン」

- ・震災による断水が続く中、病院の受水槽から水を汲み、排泄のたびにバケツで水を流していました。バケツ1杯の水でも流れないこともあり、感染予防のための手洗いの水も必要だったので、1日のうちに何度となく受水槽へ水汲みをしました。
- ・震災から10日ほど経過した頃、益城町から下水管の破損で排水は不可と連絡が入り、全てをポータブルトイレに切り替えたのですが、処理物が増え、職員の疲労も限界に近づいていました。そのような中「ラップボン」の支援物資が届きました。排泄物をビニールで自動的に包み、清潔で臭いも漏れない、そして職員の手間が省ける優れものでした。水が出ず、排水が出来ない状況での救世主でした。

1回ごとに排泄物を凝固剤で固めて自動密封するので、水が要らず手も汚れない「ラップボン」。1回セットすれば50回使用でき、長時間使用可能な充電式なので職員の手間もかからない。

